

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第14号

平成12(2000)年3月31日発行

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史資産調査会

事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内

〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1

TEL.045-225-2171

FAX.045-225-2172



写真撮影：中山洋

横浜情報文化センター

コンクリート・ルネサンス  
横浜情報文化センター

横浜国立大学教授・横浜市歴史資産調査会調査委員

吉田綱市

ハマの震災復興のシンボル旧横浜商工奨励館が、この春、リフレッシュしてわれわれの前に姿を現した。この建物がある位置は、日本大通りと本町通りが交差する古くは米国領事館のあった横浜の最枢要の場所であり、いやがおうでも人の目を集めざるを得なかったのだが、もう20年近くも、あまり使われてはいなかったようである。もちろん、その典雅な姿は、ただあるだけで十分の存在感を保っていたが、誰もがその活用を願っていたに違いない。その注目の建物が、日本新聞博物館や放送ライブラリーという先進的な施設を含んだ横浜情報文化センターの一部としてよみがえったわけである。待望久しい復活といってい

だろう。  
この建物は昭和4(1929)年に建てられ、横浜商工会議所などの商工団体の事務所や商工業製品の陳列場として用いられてきた。昭和50(1975)年に山下町に産業貿易センターが完成して、そちらにその機能を譲るかたちで

静かに老後を送っていたのだが、今回、新しい重要な役目を得て二度目の生を歩み始めることになる。外観はもちろん、内装も主要部分は忠実に修復保存されており、かつて貴賓室と呼ばれた和風趣味あふれる部屋も公開されるという。いわば齢70にして生まれ変わったわけだが、そのために全身の慎重な検査を受け、相当な手術も受けている。

鉄筋コンクリート造の建物の保存というのは、一般に大変難しいとされる。その最大の原因がコンクリートの中性化である。つまり、コンクリートというのはアルカリ性によって鉄筋が錆びるのを防いでいるのだが、時間が経つにつれて中性化するのが常で、そうすると鉄筋が錆びてきてその耐力が保てなくなるのである。それで、鉄筋コンクリートの建物を保存再生するためにはコンクリートをもう一度アルカリ性に戻す必要がある。しかし、これが大変な作業であり、そんなに面倒で費用がかさむのだったらいっそコンクリート造の建物は一度解体して、復元的に再建されることが多かった。

しかし、この旧横浜商工奨励館では、鉄筋に電気を長時間流すことによってコンクリートの再アルカリ化の工事が行われ、躯体自体が保存された。だから、鉄筋コンクリート造の建物の保存再生のパイオニアなのである。



旧貴賓室(上)

中央階段(下)



## 関内に新たな情報拠点 横浜情報文化センター 10月オープン

(財)横浜産業振興公社情報文化センター担当部長  
鈴木正己

工期31ヶ月を経て、関内・日本大通りに、この3月横浜情報文化センターが竣工、10月に全館オープンとなる。横浜の新たな情報拠点の誕生である。この関内地区には、開港場として賑わい、様々な西洋文化が日本に伝えられた歴史があった。

特にわが国最初の日刊新聞が発行され、また電信・電話事業発祥の地でもあったことから、その伝統を今日に受け継ぎ、日本新聞博物館(財団法人日本新聞教育文化財団が開設)と放送ライブラリー(財団法人放送番組センターが開設)を中心に、情報関連企業のオフィスや多目的ホールを備えた複合施設として建設をすすめてきた。

建物は昭和4(1929)年竣工の旧横浜商工奨励館を保全した4階建の旧館部分と、今回増築した12階建の新館部分とで構成されている。

旧横浜商工奨励館は、大正12(1923)年9月1日に発生した関東大震災の復興事業の一環として、全焼したアメリカ領事館の跡地に、市内商工業界の復興と発展の拠点として、横浜市が建設したものである。

設計は横浜市建築課。主任技師・木村龍雄を中心とした設計集団が担当した。工事は多くの復興建築を手掛けた岩崎金太郎が請負った。

1・2階には国内外の商工業製品を紹介する商品陳列所が設けられ、3・4階は横浜商工会議所や各種商工団体のオフィスとして利用されていたが、昭和50(1975)年商工会議所が移転したことから、46年間の歴史を閉じた。

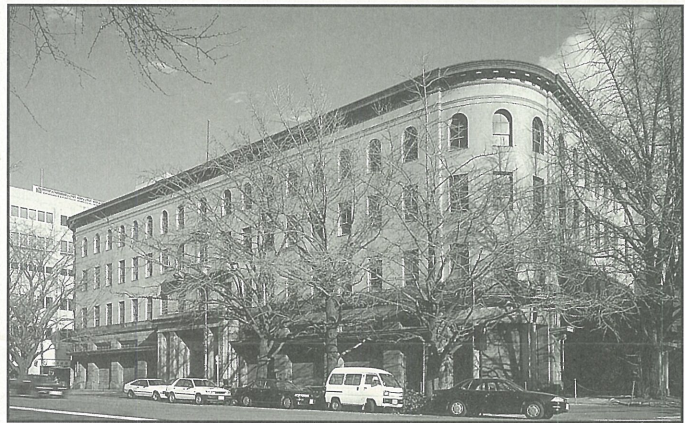
その後20年もの間、建物を取り壊す方向で検討されていたが、旧横浜商工奨励館の下を通る予定の地下鉄3号線計画がなくなり、現在建設中のみなどみらい21線に計画が変更されたことも要因となり建物は残った。

横浜市では、平成7(1995)年に旧横浜商工奨励館保全活用専門部会を設置し、「①建物の歴史的評価」、「②保全活用の基本的考え方」、「③保全範囲」についての検討を重ねてきた。今回の整備はその結果を反映させたものである。

外壁は道路に面する3面を極力残した。正面玄関から1階と、中央階段を上がり2階に及び空間には、東洋風意匠が随所に見られる。3階の旧貴賓室は、和風趣味。その照明器具は創建当初のものであり、格天井には鳳凰と水蓮の天井画がよみがえった。竣工後間もなく、横浜の復興状況をご視察された昭和天皇の休憩所として、造られたものである。

震災復興建築は、そのほとんどが昭和に始まり(復興5ヶ年計画)、昭和に終わった(取り壊された)。横浜の復興建築を代表する旧横浜商工奨励館は、昭和を生き抜き、2000年のこの年に横浜情報文化センターとして生まれ変わり、永く後世に引き継がれることになった。

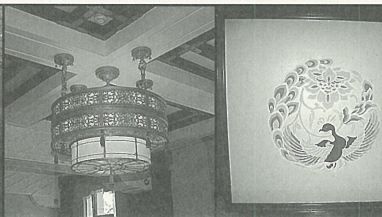
この関内に、横浜らしい都市の記憶が1つ残った。



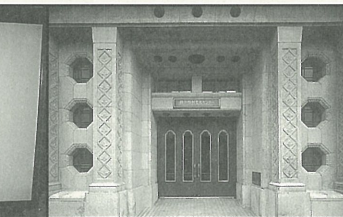
改修前



コンクリートの再アルカリ化工事



旧貴賓室の照明器具と天井画



正面玄関

## 旧長浜検疫所1号停留所について

横浜国立大学教授  
吉田綱市

長浜検疫所(昭和27(1952)年から横浜検疫所長浜措置場)は、明治28(1895)年に設けられたわが国検疫事業の中核施設である。昭和60(1985)年までは、なだらかに起伏する海沿いの緑地に数十棟の木造建造物が軒々と並べられ、桃源郷というべき別世界をかたちづけていたのだが、いまは前面の海を失い、建物もこの旧1号停留所と旧細菌検査室の2棟が残るのみである。ただし、旧1号停留所に次いで立派な建物であった事務棟は、平成10年に長浜ホールとして復元されている。

旧細菌検査室は主として野口英世ゆかりの施設として残されたわけだが、旧1号停留所は長浜検疫所を代表する建物として、つまりその建築的魅力ゆえに残された。実際、昭和60(1985)年まで存在した長浜検疫所の施設も、すべて関東大震災で大きく被災しており、震災後の建物と考えたほうがよいものが多かったのだが、この旧1号停留所は最もよく明治創建時の面影をとどめているのである。それが証拠に、この建物の小屋組は、ほかの建物と違って伝統的な和小屋である。

ところで、停留所という呼び名はバスの駅のように少し変だが、これはコレラなどの伝染病の潜伏期間が終わるまで、その時点では一応健康な船客を念のためとどめておくところである。そして、1号というのはいくつかの船客のための施設で、3等船客用には2号停留所があった。当然、1号停留所のほうが建物も設備も立派でゆとりしていた。1号停留所は、いってみればホテルのような施設である。いまは、検疫所の歴史資料の展示施設として時折公開されているようだが、もっと広く知られるべきものと切に思う。なんとといっても、横浜の稀少な明治期の木造建築であるし、それにホテルとみませば唯一の現存例なのだから。



旧1号停留所外観



旧1号停留所内部

## 期間限定公開！ 横浜検疫所1号停留所

横浜検疫所1号停留所(金沢区長浜107-8)が、7月中旬に期間限定で一般公開される。

この場所には、明治28(1895)年3月長浜消毒所が創建され、往時は数十棟にも及び木造建築群が緑の中に点在していた。当時の外観を今に残す歴史的建物は3棟で、1号停留所はその内の貴重な1棟。検疫に関する展示なども行われているので、是非この機会に足を運んでみては。

1号停留所:木造平屋建て、393.36㎡。意匠的に優れ、堂々たる風格を持つ。

入場無料。お問い合わせは横浜検疫所総務課(TEL:045-201-4458)へ。

## 歴史を生かしたまちづくりセミナー⑩

### 「緑の中の歴史的建造物を訪ねよう!」 横浜南部編 開催報告

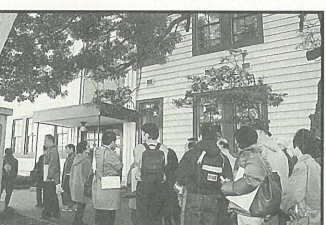
第19回目のセミナーが平成11年12月4日(土)午後には横浜市と横浜市歴史的資産調査会の共催で開催された。今回は、市認定歴史的建造物3棟を含む2カ所計4棟の建物をバスで巡るツアー形式で行われ、58名の参加があった。

金沢区長浜野口記念公園内の長浜ホール(横浜検疫所長浜措置場旧細菌検査室、同日事務棟)では、横浜国立大学教授吉田綱市から建物の歴史的価値や保全の背景などについてスライドを交えて説明があった。ここは、医学博士野口英世の活躍の場であり、都心部とは違った当時の「みなの横浜」を今に伝える重要な財産である。

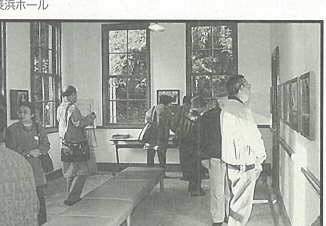
旧長浜検疫所1号停留所は、現役の検疫所敷地内に建ち普段は見ることができない。しかし、今回は検疫所の協力により、業務管理室長の小井関さんから説明を受けながら内部を見学することができた。参加者は、貴重な体験に「見学できて良かった。今後も残してほしい。」と感想を述べていた。

旧金子家住宅主屋は、戸塚区舞岡公園内に建つ。水田に沿った園路を歩き、小谷戸の里の入口で東海大学稲葉和也助教授に迎えられた。やがて、緑に囲まれた中にとっしりと腰を据えた茅葺き民家が現れると、参加者から歓声が上がった。民家内の団炉裏端でお茶を啜りながら、この建物の歴史的

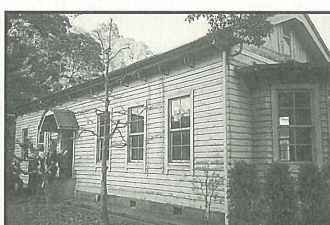
価値などについて稲葉助教授から説明を受けたが、その雰囲気は当時にタイムスリップしてしまった感じである。その後、古民家のスタッフである福田さん



長浜ホール



から、民家の活用や水田耕作を行っている会について紹介があり、魅力的な歴史的建物を生かしていくためには、様々な努力が必要であると認識できた。「歴史的建物との出会いが、歴史観とともにその時代へ立ち入ることができるような感覚を覚える。」



旧長浜検疫所1号停留所



という参加者の感想があった。その感覚をまちづくりを生かすことで、より愛着のある個性的なまちへと成長できることになると思う。今後も広く理解が得られるよう紹介の機会を増やし、更に横浜の魅力を高めていくことが必要だろう。



旧金子家住宅主屋

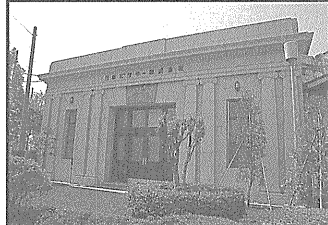


## 新たに3件を認定 京浜臨海部の工場建築は初認定

横浜市は、「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づく認定歴史的建造物として、近代建築や西洋館など新たに3件を認定した。これにより認定歴史的建造物は合計40件になった。

### ●日本ピクサー第一工場

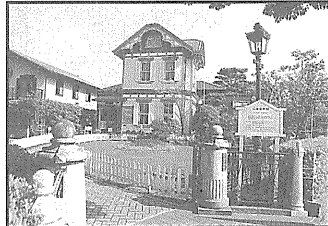
昭和5(1930)年に竣工した歴史的建造物で、正面入口部分がほぼ当初のまま維持されており、クラシックな外観をもつもので、京浜臨海部では初めての認定。



日本ピクサー第一工場ファサード

### ●山手資料館

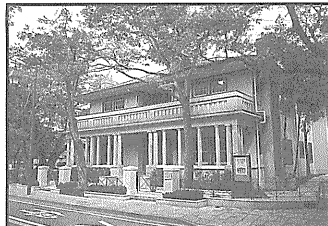
明治期に和館と洋館とが併設する邸宅建築として建設されたうちの洋館部分で、明治期の市内に建設された西洋館として唯一の建物。



山手資料館

### ●山手234番館

震災後(昭和初期)に建設された共同住宅で、このタイプの西洋館としては山手に唯一残る建物。市の施設として保全改修を行い、平成11年7月から開館。



山手234番館

## 山手111番館(旧ラフィン邸) 附:設計図(青写真)7枚 市指定文化財に 指定年月日:平成11年11月1日

この建物は横浜山手の主要な導入路である谷戸坂を登りきった重要な場所に立地し、関東大震災後に建てられた西洋館の中では極めて真の高いものである。建物の形状はほぼ正方形に近く、2階部分は1階部分より極端に規模が小さく安定感のある立面構成となっており、全体としてスペイン風の様式でまとまっている。内部は1階ホールに大きな吹き抜けを持ち、その上部の2階には回廊形式のギャラリーがつく特徴ある構成になっている。

設計者は、横浜に事務所を置いて活躍したJ.H.モーガンで、山手111番館はモーガンが手がけた個人住宅の代表的なもののひとつである。「港の見える丘公園」内の公共施設として活用するため、大規模な改修が行われ、現在建物の内部が展示公開されている。

また、当初の設計図が残されていることも貴重であるため、附属物として指定された。

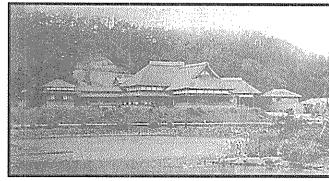
山手111番館



## 旧原家住宅修理工事の現状

平成10年度に市文化財に指定された「旧原家住宅」は、三溪園の正面を入った右側にある原三溪氏の邸で、明治35(1902)年頃に建てられた。居宅でありながら、来客をもてなす公的な空間を併せ持った規模の大きな和風建造物であり、下村鶴山・横山大観・前田青邨といった日本画壇の巨星がこの場所から輩出したことも考慮すると、日本全国でも類例のない横浜が誇れる近代和風建造物と言える。現在発掘調査や古写真をもとに、創建当初の姿

に復元する工事を行っており、完成後は、アフターコンベンションや市民利用施設として活用される予定。



創建当時の旧原家住宅

## ジェラール水屋敷を偲ばせる 元町公園再整備

元町公園は、かつてフランス人ジェラールが、フランス瓦の製造とともに谷戸の湧水を集めて船舶給水業を営んだ場所「水屋敷」と呼ばれていた。今回の再整備により、公園入口にあって現在も湧水が流れ込んでいる地下貯水槽の天井部分をはじめ、内部の様子を直接見ることが出来るようになる。また、プール管理棟の屋根がジェラール瓦を使って改修されるなど、公園を訪れる人に往時の「水屋敷」の一端を感じさせてくれるものになりそうだ。

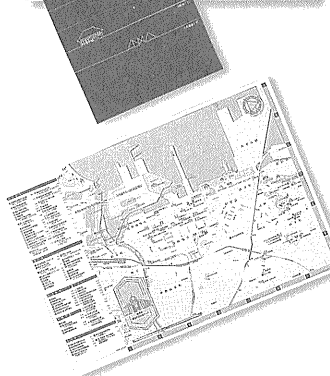
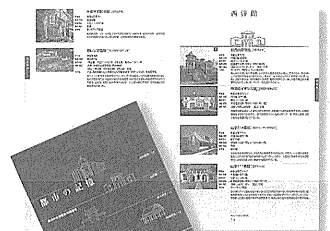


整備のすすむ水屋敷

## 『都市の記憶— 横浜の主要歴史的建造物』 発行!

横浜市内にある代表的な歴史的建造物を紹介する新しい冊子が発行された。既に発行されている都市の記憶シリーズから主要なものを抜き出し、さらにシリーズにない社寺、古民家、近代和風建築を加えて充実した内容となっている。取り外し可能な地図がついているので散策にも便利。

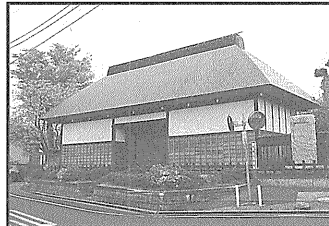
1部500円で横浜市市民情報センター他で販売。



## リニューアル! 馬場の赤門

「馬場の赤門」の呼び名で親しまれる旧澤野家長屋門が、(仮称)馬場赤門公園の公園施設として生まれ変わり、更に使いやすくなって平成12年度中にオープンする。

今回の整備では、耐震補強と下屋の復元が行われている。下屋は創建後、昭和13(1938)年までの間に増築されていたもので、この復元によって地域のイベント拠点等に利用可能となり、市民に親しまれる歴史的建造物がまたひとつ増えたことになる。



旧澤野家長屋門

## 旧英国海軍物置所護岸 (海岸石積護岸)姿を現す

港の見える丘公園の東側、新山下町で幕末に設けられた石積海岸護岸が確認された。この地は、1861年に英国が海軍物置所用地として獲得した場所で、山手で居留民が最初に占用した場所とされている。大正期に海岸が埋め立てられ地中に埋まったが、建物(バンドホテル)解体工事により、地盤を掘り下げたため再びその姿を現した。この護岸は、幕末・明治期の山手外国人居留地の北端の地理的位置を示す歴史的資産として大変に貴重なものであり、今回の工事により目の見えることになったのである。

## 歴史的建造物を生かしたイベント相次いで開催される 「山手西洋館フェスタ'99」 「ファッションフェスタ 横浜文化祭21」



スタンプラリー

フェスタでは全館をまわると抽選で商品がもらえるスタンプラリーを中心に、フラワーアレンジメントや着物のファッションショー、家具づくりの実演など各館で工夫を凝らしたイベントが開催され、観光で訪れた方々から、近隣の小学生まで、延べ4,000人を超える人々が集まった。

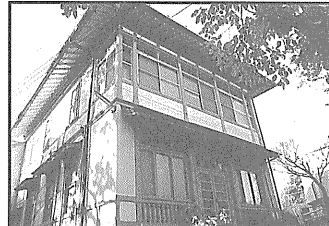
平成11年10月30日、秋晴れの中、山手地区で横浜市が公開している西洋館など全7館が合同でおこなうイベントとしては初めての「山手西洋館フェスタ'99」(主催:財)横浜市緑の協会、後援:横浜市)が開催された。

## カトリック横浜司教館改修工事 一部創建当初の姿に

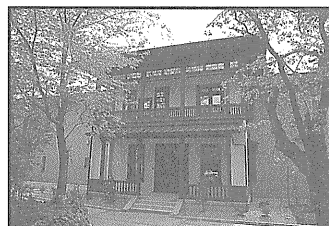
カトリック横浜司教館は、明治43年に相馬邸の一部として東京に建設され、昭和12年に横浜山手の現在の地に移築再建されたものである。

この度の全面建替えを契機に、歴史的景観形成を図るため、山手本通りから見える位置に移設するとともに、エントランス部分が創建当初に復元された。復元にあたっては、できる限り当初の部材を使うこととし、部材のペンキを剥って色彩の変遷を追い当初の色を確定したほか、写真等の資料によりよい戸を製作設置している。

また、車イスに対応できるようにスロープ等を設置するなど、新たな機能も取り入れられている。RCの建物に木造の意匠を復元するという新しい復元方法としても注目される。



改修前



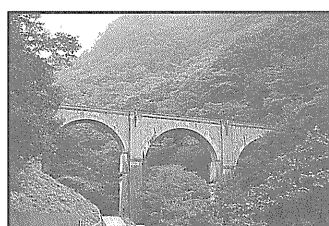
改修後

## 今注目の近代化遺産について考えよう! 全国近代化遺産連絡協議会 平成12年度は横浜市で開催

近年、全国で近代化遺産の保存と活用が注目を集めている。近代化遺産とは、日本の近代化に貢献した施設・構造物をいう。

全国近代化遺産活用連絡協議会(略称「全近」)は、各地域に残された近代化遺産の保存と活用を通して、地域を活性化する方法を考え、実行していくことを目指して、平成9年11月に設立された全国組織である。財団法人日本ナショナルトラストが、平成11年4月より「全近」の事務局を担当しており、現在、会員として39市町村、特別会員として30都道府県・5法人が加盟している。

平成12年度の総会とシンポジウムは、11月に横浜市で開催される。シンポジウムへは一般市民も参加可能。関心のある人はこの機会に参加してみよう。



旧海軍倉庫第2階メレンガアーチ橋梁

●シンポジウム参加のお問い合わせ先  
全国近代化遺産活用連絡協議会事務局  
(担当:米山山本,平賀)  
〒100-0005  
東京都千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル810  
財団法人日本ナショナルトラスト内  
TEL:03-3214-2631 FAX:03-3214-2633  
e-mail yamamoto@national-trust.or.jp

また、平成12年2月19日から2日間、わたり、「ファッションフェスタ横浜文化祭21」(主催:(社)横浜ファッション協会)と題したイベントが市内各地で行われた。

歴史的建造物もその会場となり、都筑区のせせらぎ公園「古民家」ではクラシックコンサート、中区の「山手111番館」ではフラメンコなどが催された。参加者はいつとひと味違った歴史的建造物の生きた表情を満喫していた。

# 歴史を生かしたまちづくりセミナー②「**絵画**で**感じる横浜の歴史**」開催される

第20回目のセミナーが平成12年3月16日(木)から28日(火)に開催された。今回は、「絵」をテーマに「歴史的建造物絵画展」と「親子で描こう山手の西洋館」の2つの催しが開催された。

## 歴史的建造物絵画展

(関内・山手歴史的建造物絵画展)



関内・山手歴史的建造物絵画展

3月16日から28日まで、山手234番館において横浜市市の歴史的建造物を数多く描いている画家の中尾良一氏と斎藤浩一氏の作品35点が展示された。

建物細部まで写実的に表現する中尾氏、建造物の印象的な表情を柔らかい線で表現する斎藤氏、対称的な技法による両氏の作品は訪れた多くの人々を魅了したに違いない。「建築図面や写真とは違った建物の風格や温かみなどを感じた。」「普段見過ごしていた建物の細部までじっくりと見ることができた。」との声が多く聞かれた。また、実物を見ようと地図を片手に会場を後にする姿も見受けられた。「作品を通して建物の大切さや魅力を感じてもらいたい。まだまだ描き続けていきたい。」と作者である中尾氏、斎藤氏は語った。2人のメッセージは、訪れた多くの人達に伝えられたに違いない。

## 親子で描こう山手の西洋館



子供たちの絵を見まわる中尾氏(上)と斎藤氏(下)

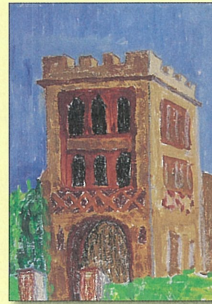
春の気配を感じる3月19日(日)元町公園において西洋館のスケッチ教室が44組、100名を超える参加により開催された。親と子がそれぞれ同じ建物を描いたり、親子で一枚の絵を仕上げたりと会場全体がほのぼのとした雰囲気につつまれ進められた。元町公園周辺には、山手234番館やエリスマン邸をはじめとし多くの西洋館が残されており、どの建物をどんなアングルで描くかというのも大変興味深いものであった。スケッチは中尾氏・斎藤氏の指導のもと熱心に行われ、昼食も忘れて没頭していた親子もあったようだ。

描かれた作品は、指導していただいた両氏の絵とともに翌20日から28日まで山手234番館のギャラリーに展示された。子供のもつ独自の感性と自由な表現により描かれた作品はとても生き生きしており、訪れた多くの人が作品の前で足を止めていた。参加者からは「親子での良い思い出になった。」「また開催して欲しい。」と大変好評であった。スケッチの指導をお願いした中尾氏・斎藤氏は「子供の絵は表現力が豊かなのでとても楽しい。歴史的建造物という難しいテーマにもかかわらず大変素晴らしい作品ばかりである。この様なイベントを通じて建物の興味を持ってもらえれば」と語っていた。

21世紀を担う子供たちがこの日の思い出を胸に、まちの歴史や横浜の魅力について関心を抱いてくれることに期待したい。



青木小学校5年 鈴木健夫



あざみ野第二小学校 鍋島寛典



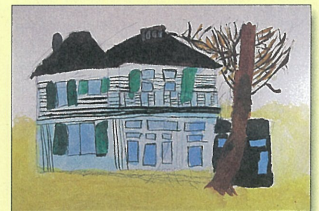
東戸塚小学校1年 斎藤 峻



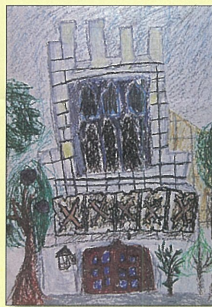
山下小学校5年 荒木竜平



上白根小学校2年 堀ノ内悠希



精華小学校3年 山中雅八



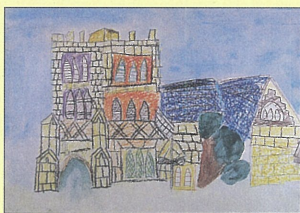
横浜国立大学附属小学校2年 片桐 舞



西本郷小学校3年 王 文沛



雙葉小学校3年 柳川あかり



カリタス小学校3年 磯山 遥



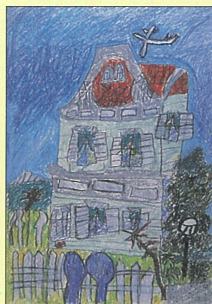
浜小学校5年 関 まさみ



三ツ沢小学校4年 樺山 達也



上野田小学校1年 倉田 聡美



青木小学校1年 鈴木 菜子



横浜国立大学附属小学校3年 もり ゆかこ